

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年四月
	遊児		楽 高原 鶴城	癒香 風子		ひろし 蝸牛 展平	朝香	彩香 風子	暦文 田猫			のり子			
落椿花卉散らさず朽ちにけり	その愚痴も三度蛙の目借時 <small>眠くなる眠くなる……。</small>	咲くほどは散つてしまへり花の雨	掃除機の枕に迫る朝寝かな <small>春をとて面白く詠んでいると思いましたが。掃除機の音が聞こえてきます。仁王像の眉間に色気感じる作者の感性に感服。</small>	春雨や眉間艶めく仁王像	満開の花を支える枝の黒	道すがら上野へ廻る花月夜 <small>気持ち良き夜花の上野に寄つてみる。上野の森の夜桜と皓皓とした月が見える。上野のあたりの夜桜が目には浮かびました。</small>	多言語でお国自慢や花の宴 <small>現代の日本のお花見の一つの姿ですね。中七がいいですね。</small>	春分の月の欠けたるあたり見る <small>春分と言う季節の変わり目、歳の変わり目なのに持つ曖昧な変化が中七、下五によく表現されている。春の月と春の夜の夜の気分がよく出ている。</small>	散る桜固き握手の上に乗る <small>握手の上に花びら、又会おうの握手。誓いの握手を交わす二人。後押しする桜。美しい句。</small>	四月や一喜一憂去り出合ひ	春うらら君と過ごした五十年	春眠や部屋いつぱいのドーパミン <small>身近にはこんな春も訪れている。</small>	百千鳥会話の弾む立ち飲み屋	塀の中髪を伸ばせて卒業す	
森佳月	荒一葉	網野月を	ありぎりす	彩香	しーしー	破れ蓮	傘張り浪人	里もりを	幸子	衛	宇田靖之	檜鼻ことは	ささき良月	米山カロ ーリング	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
	かれん しーしー 一駄歩 梗舟 みづる ひろ志	ひろし 素風 鶴城		のり子 凡士	かれん 朝香 月を					鶴城	米山 破れ蓮	允孝 暮風 蝸牛	一駄歩	
紅枝垂れ妣（はは）の九品（くほん）の浄土かな	白少し足してキャンバス春の空  春の空の白っぽい空をよく捉えている。雲が白くなると春ですね。霧つてしている分だけ白の絵の具が必要だ。少し湿度が上がると、淡く霞んで見える春の空の色。白を少し足すことで春の空になる。	もてなしの心に触れる徒遍路  四国八十八箇所霊場の地元の方々の真心が感じられる。もてなしの様子が見えてきます。春になるとそうですね。	別れ霜未明の報に絶句する	田を返し目覚める土の黒々と	ボルタリング手足に春の息吹かな  自然の命の逞しさを感じる句。きつと今年も豊作でいい米がとれるでしょう。	花の宿いささか温き露天風呂  ボルダリングのゆるゆるな手足に動きが感じられる。温かくなるとボルタリングの季節なんですよ。	馴染みなれば田越しに遠見花見酒	デコピンの啞へるボール風光る	葉桜と 青葉香る 初夏覚醒め	明日閉ぢる著莪をひと夜の夢とせむ  花を愛でる心が素晴らしい。	顔隠すほどの花束春惜しむ  顔隠すほどが良い。卒業式の光景か、季語が効いている。	声高に親を急かせる入学子  新児童がお母さんのを急かしている光景が面白いです。万物が生き生きとする清明、我もまた生気に満ちて。希望に満ちた入学児の姿が見える。	春光や卓球場の赤い髪  赤い髪の人気が気になって仕方ない。	ドジャースの帽子斜めに耕せり
光雲 2	くるみ	安田蝸牛	青木鶴城	一駄歩	絵夢	遊児	高原ひろし	新 曆文	小山哲司	みづる	神谷たくみ	松田素風	新井のり子	岩本展平

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
たくみ	ひろ志	ひろ志	絵夢 癒香	大越 くるみ 朝香 展乎	しんい 良月			月を	楽 土璃		凡士	絵夢		
ばさりと は散り きれぬ 牡丹の 自愛	花まつり 天地も 人も燃 え上がる	咲き競い 散るを 競いて 花が征 く	風を連れ 心地良 さげに 舞ふ桜	絵手紙に でかく 筍“掘 りに来 い”	ぼんぼり の明か りはん なり夕 桜	目借時 富士山 麓に鸚 鵡啼く	施主の名 の透け るぼん ぼり春 祭り	薄紅を受 けし蛇 の目や 桜散る	雨雫弾 きて光 る接穂 かな	反りあ がる城 の石垣 山桜	クワイ 河マー チとと もに春 の土手	春風の 車体は 子らの 絵パツ カー車	春の湖 最終走 者まつ 子いて	春の雪 近道は 坂バス 乗り場
大越 マー レット	秋谷 風舎	霜里	平野 楽	河野 凡士	俳 爺	森下 山菜	ひろ 志	龍野 ひろし	山川 充	立野 音思	石関 六弦	小林 土璃	いさ む	和田 イチ子

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年四月
のり子 みづる	ことは 風舎	かげろう	ことは 彩香 月を たくみ 六弦	浪人		ひろし 展乎 暮風 絵夢 蝸牛 癒香 梗舟 ひろ志	遊児 一駄歩		米山 暮風 くるみ		寒立馬				
春愁の体は椅子に密着し  身近にはこんな春も訪れている。物憂くて、行動を起こそうとしても金縛りにあつたように身動きできない感覚か、感性だけが研ぎ澄まされていくような謎めいた印象。	君唄へ我は踊らむ花の下  花の下、心通わせる二人の情景が浮かんできます。明るくリズムカルな句で、楽しげな花見客の姿が浮かんでくる。	青空の飛行機雲と藤の花  青白藤の色の対比が見事。	蜘蛛の巣のいつも真中に居る孤独  語らう相手もなく、ただ真ん中に居続けるだけの孤独。映像が静かに立ち上がり、蜘蛛自身に人生の自分を重ねているような詩的措辞に感服。「孤独」が主観の極みでしょうか。平明な詠みで問いかけて来るものがあります。何か都会の孤独を感じます。	若き日に焦がれた街へリラ招く  無音にて道路につもる花いかだ	無音にて道路につもる花いかだ	補助輪の取れて軽やか風薫る  誇らしげな子供の笑顔も目に浮かぶ。初めて自転車に乗れた時の喜びが伝わってくる。幼子の自転車に乗る喜びを上手く表現した。子が成長し気持ちよく自転車に乗っているようです。自転車が上手に乗れるようになった。子の笑顔が見える。「軽やか」がいい。補助輪が取れた日を思い出しました。	むらさきの筑波嶺はるか葱坊主  宵空の広さかな。風景が大きくて良い。	湯の宿へ雪解を待ちて峠越ゆ	遠吠えにそつと筆置く春愁  そつとが良い。春愁の感じがよく出ている。遠吠え、春愁、言葉の雰囲気に惹かれました。	春疾風海の匂ひと万博へ	春暁や大物釣りの予感かな  多分予感通りに大物を釣り上げたと察します。	北窓開く並べ干すスニーカー	惜しげ無く振り払ひしや飛花落花	クアツクアツと烏姦し樟若葉	
石川順一	染谷風子	佐藤幹子	岡本たか子	寒立馬	雪待月田猫	後藤允孝	しんい	大東暮風	岡崎梗舟	総太郎	かげろう	かれん	酒井癒香	朝香	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年四月
寒立馬		土璃	高原		しーしー		素風		凡士 幹子		大越 高原		浪人 六弦		
想ひ出に生くる男や花は葉に <small>未練は男の情念、しかし心の支え。</small>	花の下カメラに収めた妻の笑み	肩寄せて九戸一村山桜 <small>山狭の村の遅い春。「山桜」が効いている。</small>	谷あいの二人静がいいと君	くしゃみして涙目眩し花曇り	春嵐飛ばせあたしをあの日へと <small>そうそう風に乗って時空をも。</small>	夜明け前なにも聞こえぬ彼岸かな	双蝶や野面（のもせ）の風に演舞せり <small>野原の風にワルツを踊るように舞う二匹の蝶が見える。</small>	あおとあを境目探す春の空	大いびき横に聴いてる春の夜 <small>我家は妻が“うるさい”とどなる、するとおとなしくなるようで、私は全く記憶がない。長年付き添うと大いびきにもならされました。何とも長閑な句ですね。</small>	何年を生きての今日か散る桜	あぎとふの鯉壊しゆく花筏 <small>鯉の大きな口がユーモラス。</small>	空仰ぎ万緑の待つ土筆かな	桐箱にむすめの名前雛納 <small>いろいろ楽しい思い出があるのでしよう。</small>	振動と量子力学花の声	
網野月を	森 佳月	荒一葉	しーしー	ありぎりす	彩香	里もりを	破れ蓮	傘張り浪人	宇田靖之	幸子	衛	米山カロー リング	檜鼻ことは	ささき良月	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
		一葉 たくみ	破れ蓮 素風						良月 あらか 梗舟 風舎	ことは かげろう 遊児 曆文 あらか 六弦 幹子			土璃 破れ蓮	
春の雪明日は通院最終日	葉桜や帯締めきりり萌黄色	コンペイトーの噛めばほろほろ山笑ふ 「コンペイトーの噛んだ時の甘さと春の山の微笑みが共鳴している句。 「ほろほろ」と山笑うは絶妙ですね。	菜畑の上にふうはり春の月 春のやさしい空気が伝わる。朧な山家の景が想起される。	霾（つちふる）や黑夜にそびゆ大古墳	疾る影空に燕の流線形	フジテレビ昭和時空や朧かな	人の子と 競い高めよ 春麗ら	子のスマホ逃水を撮る旅路かな	花筏古城の濠の厚化粧 写生がいいです。筏になると厚化粧です。「厚化粧」という比喩が印象的です。花びらが幾重にも積もり、濠の周りには幾本もの桜が咲き誇っていた情景が目に浮かびます。古城なるがゆえに厚化粧ですか！さぞ桜の見事な古城なのだろう。厚化粧がよい。着飾ったお局の姿も浮かんでくる。	新入りを連れて五月の秘密基地 仲間たちの秘密基地に「新入り」を案内する少しの誇りと、ちよつとした緊張感、ワクワク感が伝わってきます。空き地に土管のあつた頃。秘密基地は男の子の初の冒険。新入りは新一年生か、それとも転校生か……初夏の陽ざしの中、小学生の男の子たちが笑顔で交わしながら秘密基地へ向かう姿が目には浮かびます。秘密基地と聞いただけでわくわくします。新学期になり新しい友達ができただけで秘密基地は子どもにとつて大切な場所だと思えます。新人をとつておきの店に連れて行くのは5月ですよね。	花筏瞑りて近き浄土かな	野遊びの子等はいつしか風に翔び	人見知りせぬ子猫とて貰ひ受く 「人見知りせぬ子」の措辞に、詠者のやさしさと子猫の愛くるしさににじみ出ている。子猫の愛らしさが感じられる。	丸ビルの二階のテラス春の昼
和田イチ子	青木鶴城	くるみ	安田蝸牛	遊児	一駄歩	絵夢	小山哲司	高原ひろし	新 曆文	神谷たくみ	みづる	岩本展平	松田素風	新井のり子

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
		浪人	曆文 風子 俳翁		あらか	しんい しーしー みづる	風舎		米山	允孝	かげろう	楽	大越 彩香	允孝 寒立馬
遠山の薄墨花の並木道	画家は今やつと筆取り風光る	大将は舟唄すさみ蒸鯨	口開けてアサリが笑う四月馬鹿	東西東西飲めや歌への花の宴	母の勝ち遠足の日の象の尻	目が合ひしばかりに子猫うちの子に	ふり向けば浅き草むら雉走る	たくさんの友新しき夏初月	雨に咲き風に散りたる桜かな	ぶかぶかの学帽児童風光る	陽炎や海の彼方は夢の国	地底よりいのち貰ひし桜かな	三叉路に迷ふ逃水捕らへけり	老いの家人形無くも桃の花
朝香	大越マー ガレット	河野凡士	霜里	平野楽	森下山菜	俳翁	山川充	ひろ志	龍野ひろし	小林土璃	立野音思	石関六弦	光雲2	いさむ

水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年四月

桃の花がひつそりと活けられている様子がうれいすね。春は誰にも来る。頑張りましょう。

逃水が迷っているとは面白い発想。景も浮かび、季語の本意もよく突いて、その上、時間経過まで見える。

桜の美しさの源が感じられました。

湾を挟んだ反対側から見えるのか見えないのか、季語が絶妙。

今は学帽ではなくて野球帽ではないかとおもいますが、確かに新児童の場合は少し大きめの防止だったでしょうか。でも面白いと思えます。

リズムが良い。

雉が、かさかさとして走り去る景が浮かぶ。

目が合ったのも縁なんですよね。そして子猫と作者は幸せになりました。とき。一目惚れしたのか、じつと見つめられ逃げられなくなったのか、ともかく家族の一員に、そしてすぐその中心となる予感。

親子遠足だったのか、それとも象を見て母を思い出したのか——いずれにしても、たくましく頼れる「肝つ玉母さん」の存在を感じさせる一句です。

アサリが笑うの表現が上手い。上5中7及び作者が4月馬鹿そのもの。この句のようなことをアサリはしなないがすると詠んだことが四月馬鹿なのである。



120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106
田猫			しんい	良月	かれん 俳翁		一葉 俳翁			幹子	一葉	田猫	くるみ	
目を貸しし記憶あやふや目借時 <small>春眠の季節の実感がこもる、ユーモラスな句。</small>	春風や回廊の下を素通りし	清明の朝のびやかに床を出る	代々と続く旧家の門桜 <small>門桜、まだまだ元気で堂々たる姿が思い浮かびます。</small>	着岸の船の一揺れ木の芽風	夏はじめ水平線は模糊として <small>夏のはじめのぼんやりとした水平線に焦点を当てたところが良い。夏はじめだから当季の詠みではないが、水平線の様子はとらえている。</small>	すべり台に立ちてさえずり近きかな	さみどりの雨の滴や柳の芽 <small>柳の芽を「さみどりの雨の滴」ととらえたのが手柄。さみどりのしずくが柳の芽という季語で生かされた。</small>	菜の花や川面に見ゆる鯉の群	近傍も競う桜のここかしこ	南国の駅メロ流れ燕来る <small>燕は駅で巣作りするのをよく見かけます。駅メロも流れゆつたりとした明るい南国の駅が目につかびます。</small>	つんつんと土突き生えるつくしかな	龍天に盆栽村はリニユール <small>埼玉県の盆栽村か。季語が絶妙。</small>	花あけび風にのりゆくリコーダー <small>季語の「花あけび」がお見事！</small>	山城やしばらく浸る花の道
染谷風子	石川順一	寒立馬	佐藤幹子	岡本たか子	しんい	雪待月田猫	後藤允孝	総太郎	大東暮風	岡崎梗舟	酒井癒香	かげろう	かれん	秋谷風舎